

地域誌「てくり」の15年

～まちを編集するということ～

▽クリエイティブな横のつながりから生まれた本

盛岡の地域誌「てくり」は2005年に創刊、以後年2回のペースで現在まで28号を発行している。途中、東日本大震災のために発行延期を余儀なくされたりもしたが、なんとか途切れずに続いている。

発行元であるまちの編集室のメンバーは現在3名で、私のほかにライターが2人。そもそもその始まりは、岩手県内のフリーランス、クリエイティブ事業者を集めて某行政外郭団体が主催したセミナーと、その後の懇親会にてたまたま同じ席になった者たちの「なにか面白い事やりたいね」という駄話からだった。私は1歳の長男を抱えて夫と共に盛岡に戻ってきたばかりだったので、仕事の人脈を得る

ためにセミナーへ参加したようなものだったせいもあり、渡りに船、すぐに話がまとまった。デザイナー、ライター、カメラマンが揃えば、何かできる。やる気さえあれば。

その時集まったメンバーで商店街のリーフレットを作成したり、盛岡地方振興局の仕事を受託したりしながら資金を貯め、いよいよ何か一冊にまとまったものを制作する段になった時、まず考えたのは「テーマ」であった。地方都市に暮らす主婦でもある私たちメンバーにしてみれば、身近な物事がいい。岩手は広いので取材をするにも時間も経費もかかってしまう。では自転車で回れる距離、盛岡市内をテーマにしよう。たまたまこの時代に盛岡に居合わせた私たちにしかできない、小さな物事をつぶさに拾い上げる本。台所(厨)視線で、「てくてく」よりももっとゆっくりしたペースの雑誌。そんな流れで「てくり」は

動き出した。

▽「伝えたい、残したい、もりおかのふだん」を綴る本

2003年、前潟にイオンショッピングセンターがオープン、2005年にはダイエー盛岡店閉店、ついで2006年にはイオン盛岡南がオープン。当時は古いものから新しいものへの移行の時代というか、盛岡にとって変化が大きい時でもあった。以来、ここにはこんな建物があつて、こんなことが起きていたんだよ、と次世代へ伝えていきたい、そして「ハレ」よりも「ケ」、主人公よりもむしろ名脇役に光を当てたい、という我らの思惑が「てくり」の誌面に反映されている。

特集テーマは「メイドイン盛岡」「喫茶店」「てしごと」「山登り」「古いもの」などなど、



LLPまちの編集室
(盛岡市)
編集者/アートディレクター

木村 敦子



てくり28号 (最新号)

多岐にわたるが、読者の皆様からいただくメールなどを拝読していると、県外の方から「てくりを読んで、盛岡に行ってみたくなった」という嬉しい声をいただくことが多い。

私とて、十代の頃は「盛岡には何も無い」と思っていたのだが、50を過ぎると「ほどほどになんでもあるな」となるのだから現金なものだ。実際のところ、東北の5県に住んだことがある経験からすると、盛岡は書店、映画館、喫茶店、ライブハウス、ギャラリーなど、文化的なものと恵まれているという点では仙台に次ぐのではないか、と思っっている。なにより、街中に人が歩いている。創刊当初は「盛岡をテーマにするなんて、すぐにネタ切れになるのでは？」と言われた

ものだが、いやいや、ネタが途切れることは無い。自分たちはもつと地元で自信を持ってもいいのではないか？ との思いは、刊を重ねるごとに強くなるばかりだ。

△しかし、「まちづくり」がしたいわけではない

「てくり」を発行しているのだから「盛岡」が大好きなんですよ？ と問われると、申し訳ないが苦しい笑顔になってしまう編集部一同である。

というのも、先にも書いたように「てくり」のテーマ設定は割と消極的な理由でもあったので、あくまでもやりたいようにやるためのわがままなメディアであり、まず自分たちが楽しいかどうか、が重要となる。

2011年、震災後の5月に始めたおよそ1ヶ月にわたる「モリブロ」(モリーオII盛岡、リブロII本を意味する造語)というブックイベントは5年間開催されたが、本をテーマとしながら主に中心市街地の回遊を狙ったイベントであり、様々なお店の方々、一般参加の

皆さんなど、非常に多くの方のご協力を得なければ成り立たなかった。

たとえば、書店は「モリブロコーナー」を設置してくださったたり、喫茶店では「本を読む会」が開催されたり、最終日にはホールコンサートを行うなど、見てくれば「まちおこし」イベントでもあったので、それ以後いわゆる「まちづくり」系のトークイベントなどへお声がけいただいたりもした。

しかしそれらは結果としてそう見えていただけであって、我々は「本のイベントが楽しいから」という純粹な気持ちが大きかったように思う。楽しそうな渦には、みんな喜んで巻き込まれてくれるのではないか。その楽しさの先に、みんなが満足する「まちづくり」があるのではないか。宮沢賢治は「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」と書いたが、「個人が幸福にならないと街は幸福になれない」ように思う。

いつのことだったか、とある大学生が卒論を見てほしい、と送ってくださったことがあった。喫茶店の研究ということで、「喫茶店はパブリックスペース。みんなのためにある場所ですよ？」と店主に質問したら、「自分にはコーヒーが大好きだからやるだけ」と回答されて自分の予想とは違った、とあった。私はその店主を応援したいし、そんな店主が選んだ街は良いまちだと思う。